

中年期における夫婦関係と適応の関連 : 混合研究 法によるシステム論的観点からの検討

著者	藪垣 将
学位授与年月日	2016-04-20
URL	http://doi.org/10.15083/00075099

論文の内容の要旨

論文題目：中年期における夫婦関係と適応の関連
—混合研究方法によるシステム論的観点からの検討—

氏 名：藪垣 将

中年期の夫婦関係は、個として、また夫婦として変化と危機を迎える中年期において、アイデンティティや実存の問題など、個人の適応に大きく影響を及ぼすことが指摘されている。本研究は、夫婦関係がどのように適応と関連するのかについて検討することを目的とした、システム論の観点を取り入れた臨床心理学研究である。「システム論の観点を取り入れる」とはすなわち、本研究においては、親密な二者関係を取り扱うこと、およびシステム論の観点を適切に踏まえた研究計画および分析方法を用いることを意味する。したがって、本稿は「二者関係」を単位としたシステム論的な視座に基づいて、量的研究法・質的研究法を組み合わせ用い、夫婦関係と適応がどのように関連しているかを示すことを目的としている。

第 I 部では、本稿に関連する先行研究を概観し、研究の課題を明らかにした。第 1 章では、システム論的な視座を心理学研究に取り入れる必要性について、先行研究からの示唆を整理した。近年の研究方法論の進歩により、これまで必要性を指摘されつつも実施することが難しいとされてきた「心理学研究にシステム論的な視座を取り入れること」が可能となったことが示された。第 2 章では、我が国の先行研究を概観し、中年期夫婦関係の現状を整理した。その結果、夫婦関係は、様々な変化と危機を迎える中年期において重要な役割を果たすこと、中年期の夫婦関係研究は「研究の谷間」であり知見が不足しているこ

とが見出された。第3章では、上記をふまえて、本論文の「問題と目的」の整理と設定を行った。第4章では、夫婦関係の質の指標として扱われてきた「夫婦関係満足度」と夫婦関係満足度に影響を及ぼすことが先行研究において示されてきた諸変数との関連について、1つのモデルに組み込んで、大規模社会調査データを用いて検討を行うことで、変数間の関連を整理した。

第II部および第III部は、第I部で整理された知見をふまえて、夫婦関係と適応の関連について、ポジティブ・イリュージョン（以下、PIとする）研究の枠組みを用いて検討した。具体的には、夫婦関係を当事者自身が評定する「夫婦関係認知」を用いて、精神的健康との関連について検討を行った。

第II部は準備として位置付け、PI研究の概観を行った上で、夫婦関係認知尺度および夫婦関係認知におけるポジティブ・イリュージョン尺度（以下、PMI尺度）の構成を行った。第5章では、PI研究の展望を行った。その結果、認知と精神的健康の関連については大きく分けて3種類の理論的立場があることが整理された。認知と適応の関連については、認知が正確であればある程度適応的であるとする立場、認知が肯定的に偏っていればいほど適応的であるとする立場、PI理論の立場、認知が肯定的に偏っていることが適応につながるが、偏りの程度が大きすぎる場合には逆に不適応的であるとする立場の3つがある。また、これらの立場は、PI研究の定義、測定方法、研究テーマ、およびPIが生起する認知領域によって、それぞれ支持されることを見出された。さらに、PI研究の今後の課題として、階層的分析法を用いること、既存のPI研究とは異なる方法によってイリュージョンを測定すること、質的研究法を用いること、縦断的研究を行うことの4点が指摘された。

第6章、第7章では、夫婦関係認知の構造について検討を行った。第6章では、個人が自身の夫婦関係をどのような視点から認知しているのかという点について検討を行った。その結果、夫婦関係は「成熟とコミットメント」「距離の近さ」「関係の悪さ」「思いやりと明るさ」の4次元から捉えられていることが示された。第7章では、第6章における夫婦関係認知のうち、どの認知領域にPIが生起するのかについて検討した。その結果、PIは夫婦関係認知のうち、「思いやりがある関係」「自然で自由な関係」「一緒に過ごす関係」「精神的な距離と不信」「配偶者への非難と攻撃」の5次元で生起することが示され、夫婦関係認知の次元と夫婦関係認知におけるPI（以下、ポジティブ・マリタル・イリュージョン：PMI）がほぼ重複することを見出された。

第III部は、第II部で構成した尺度を用いて、PMIと適応の関連について検討を行った。第8章では、ペアワイズ相関分析の手法を用いて、PMIと適応の関連について検討した。その結果、PMIは適応に寄与すること、PMIの次元によって適応との関連の様相は異な

ること、PMIは短期縦断的に安定しており、適応との関連の仕方も安定していることが見出された。第9章では、本論文においてPMIの指標として用いた「平均点以上効果」に項目の獲得容易性が及ぼす影響について検討した。その結果、PMIの生起には、評定項目の獲得容易性が大きく影響していることが示された。ただしこのことは、PIの指標として「平均点以上効果」を用いることの妥当性を低めるものではない点に留意する必要がある。

ここまで第Ⅲ部では、個人が自身の夫婦関係を評定する「自己評定」の視点から、夫婦関係と適応の関連について検討を行った。これに対して第Ⅳ部は、夫婦関係を研究者が評定する「他者評定」の視点から、夫婦関係と適応の関連について検討を行った。第10章では、健常群夫婦を対象に、夫婦の葛藤場面を実験的に設定し、会話分析の手法を用いて検討した。その結果、夫婦間葛藤の過程は「夫婦間葛藤の開始、夫婦間葛藤、夫婦間葛藤の終結」という3つの段階から成ることが示された。また、会話の中でどのような相互作用パターンが生起することで、葛藤が生起し、扱われ、解消/留保/回避されるのかが示された。第11章は、健常群夫婦との比較を目的として、臨床群夫婦について夫婦間葛藤のコミュニケーション・パターンを探索的に検討した。第10章の知見に基づいて、夫婦間葛藤の過程を夫婦間葛藤の開始、夫婦間葛藤、夫婦間葛藤終結の3つに分割し、それぞれについて会話分析の手法により詳細に検討した。その結果、それぞれの過程において、健常群と臨床群の夫婦に共通して認められるコミュニケーション・パターン、健常群にのみ認められるコミュニケーション・パターン、臨床群にのみ認められるコミュニケーション・パターンに区別された。夫婦間葛藤の開始方法は、健常群夫婦と臨床群夫婦で大きな違いは無いことが示唆された。これに対して、葛藤の扱い方および終結の方法については、健常群夫婦と臨床群夫婦で大きく異なることが示された。

第Ⅴ部は、中年期における夫婦関係と適応の関連について、本研究を総括した。

終章では、これまでに見出されてきた知見から、中年期における夫婦関係と適応の関連について検討することを目的とした。夫婦関係と適応の関連を検討する際に、PI研究の枠組みを用いた研究と、会話分析の手法を適用した研究をそれぞれ行った。第Ⅱ部、第Ⅲ部のPMI研究は、当事者が自身の夫婦関係をどのように認知しているかという観点から夫婦関係を捉えている。一方、第Ⅳ部の会話分析の研究は、夫婦のコミュニケーションを第三者である研究者が観察・分析するアプローチである。これらの研究はそれぞれ長所と短所を備えており、トレード・オフの関係にある。そこで、これらを組み合わせることによって、夫婦関係と適応の関連について多面的に検討することが可能となった。さらに、適応との関連の文脈で、自己評定による夫婦関係と他者評定による夫婦関係の関連が示唆された点も重要な知見であった。最後に、今後の課題と展望について論じた。

以上の内容で構成される本論文は、夫婦関係が適応とどのように関連するかという点について多面的に検討出来た点で有益であると考えられた。自身の夫婦関係を肯定的に捉えている程度が大きい程、精神的健康が高まる傾向が示された。また、非臨床群と臨床群では、夫婦間コミュニケーションのパターンが一部異なることが示された。これらの違いに焦点を当てた臨床場面での介入の有用性が示唆された。